

教育課程論 第4回 講義メモ 2020年10月22日

新学習指導要領のキーワードの一つに、「主体的・対話的で深い学び」があります。それは「アクティブ・ラーニング」とも言われるものです。

ただ、この概念は、新学習指導要領のキーと言われながらも、抽象度が高く、難解で、具体的にはいろいろイメージできるものです。

ここでは、いくつかの説明や解釈を読んでいただき、皆さんで自分の「主体的・対話的で深い学び」を、思い描いていただきたいと思います。

最初に、(これが一番わかりにくい文章かもしれませんが)、学習指導要領の文章(テキスト 183頁(第1章第3-1)、及びテキスト 77~81頁(主体的・対話的で深い学び)の実現に向けた授業改善)を読んでください。文部科学省による説明が書かれています。

①「知識及び技能の習得」、②「思考力、判断力、表現力の育成」、③「学びに向かう力、人間性の涵養」の3側面が、これに関連していると書かれています。

①が主体的、②が対話的、③が深い学びに、対応しているようにも解釈できます。

また、78頁の7~23行目の説明では、①興味や関心を持つことは「主体的」、②他者との対話が「対話的」、③知識相互の関連付けや創造を「深い学び」、としています。

これらをわかりやすく図で示したのも文部科学省は出しています。
授業資料4-1-1を見て下さい。

第2に対話的について考えたいと思います。

これは他者や集団や社会との対話ということで、人は単独では生きられず、必ず対話、相互作用とか、他者との関係や、集団や社会と関係しながら生きていくということです。この他者も、身近な家族、友人、恋人という第1次集団の人と、その対極の見も知らぬ他人や社会の人もあります。またその中間の人(教師や、同僚、地域社会の人)もあります。このどれを重視して生きるのかというのも人それぞれだと思います。

歌手の上白石萌音がオーケストラの伴奏でレ・ミゼラブルの *on my own* を歌う体験をして、オーケストラとの対話ということを行いました。(武内清HP <https://www.takeuchikiyoshi.com/>、2019年10月18日参照)

思想家の内田樹は、知性は集団的なものだと述べています。（「知性というのは個人においてではなく、集団として発動するものだと私は思っている。知性は「集合的叡智」として働くのでなければ何の意味もない。単独で存立し得るようなものを私は知性と呼ばない。」
(http://blog.tatsuru.com/2020/09/03_1232.html)

第3に、「深い学び」に関して、考えてみたいと思います。桐蔭学院の溝上慎一氏の「アクティブ・ラーニング」に関する文章を読んでください。（授業資料4-1-2）

溝上慎一氏は、アウトサイドインとインサイドアウトという見方で、これを解釈しています。

学校や教師から学んだものを自分の関心で内面化して（咀嚼して）それを外に出していく。それが主体的対話的で深い学びではないかという解釈です。

学ぶというのは、最初は外から入ってきて、自分の関心と結び付け表現していく。

自分で学んだものを、対話で他の人に説明していくと、理解が一層深まります。授業で、ペアワークで、理解したことを他の人に説明する場面を設定することの有効性を述べています。

溝上氏の論については、私は「内外教育」という教育新聞のコラム（「授業から深い学びへ」）で紹介させていただきました。これも、読んで見て下さい（授業資料4-1-2）

以上から、今回の問いは、『主体的・対話的で深い学び』とは、どのような学びですか。あなたの考えを書きなさい、と言うものです。

200字～1000字程度で、解答を、「課題 提出」の欄を通して、（武内）に送って下さい。（欄の中に書き込んでも、別にワードで書き、それを添付して送っていただいても結構です）